

Title	国語演習会という饗宴 皇民化政策下の台湾と教育所の子どもたち
Author(s)	山路, 勝彦
Citation	人文學報 (1999), 82: 19-44
Issue Date	1999-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/48529">http://hdl.handle.net/2433/48529</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 国語演習会という饗宴

——皇民化政策下の台湾と教育所の子どもたち——

山 路 勝 彦

- 1 教育所—警察官吏の学校
- 2 台湾総督府の戦略
- 3 日本語狂乱—国語演習会の競演
- 4 日本人の創造

近代国家の形成過程で、「国語」の地位を得た日本語が「日本精神」を高揚する道具として活用されてきた歴史は、すでに多くの論考に見ることができる（例えば、イ・ヨンスク 1996）。台湾や朝鮮など、かつての植民地での日本語教育が同化政策の支柱となっていた経緯は、会話能力の養成の域を越え高度の政治性を帯びていたことを物語っている。日本語を教えることが日本文化を教えることに通じ、ひいては日本精神を体得させることになるという論法が、当時の多くの論者に通底していた思考回路であった（例えば、川村湊 1994、安田敏雄 1997a, 1997b 参照）。

国語学習に政治性を注入する考えは、国語学の専門家のみならず、昭和10年代になって皇民化政策が謳われる時代では、台湾で植民地経営の最前線に勤務する警察官吏の脳裏にも深く浸透していた。長年、台湾総督府警務局理蕃課に勤務し、原住台湾人の啓蒙活動に携わってきた斎藤康彦も、こうした認識を抱いていた。末端組織の一官吏とはいえ、斎藤の発言には総督府が目指していた当時の国語教育の目的が、これ以上に明確な表現がないと言ってよいほど鮮明に説かれている。総督府の国語学習の戦略目的を知るうえで大切なので、引用してみたい（斎藤生〔康彦〕1936：11）。

立派な日本人たらしむるには其の第一着手として国語に習熟せしめねばならない。国語は単に言葉だけの問題ではない。其の語の中に宿る所の国民精神、即ち忠君愛国、至誠奉公、人類相愛の精神を体得せしめ、一面には文化促進の方途たらしむるところに重大な意義をもつのである。

植民地台湾で、同化政策を推進するにあたって国語学習が重視されたことは、すでに多くの研究が指摘していることであって（上沼八郎 1975, 弘谷多喜夫・広川淑子 1973, 石剛 1994）、その政策が末端組織にまで深く浸透していた事実は、この一介の警察官吏の啓蒙的発言から知ることができる。この意味で、国語教育が国民精神の涵養のために存在するという、精神主義を身をもって体現したこの発言は、日本の植民地統治の基本動向を知るうえで大切である。この発言の中身を今一度、整理しておきたい。その主眼点は、国語学習は単なる会話伝達的手段としてではなく、日本語の中に宿る「国民精神」を体得するためという、きわめて精神主義的な色彩が施され、同化政策の基軸としての役割が与えられていたという観点である。このような観点は、昭和期の皇民化政策のもとで突然、登場したのではなく、その根幹は明治の台湾領有初期にまで遡ることができ、その意味で根が深いと言わなければならない。台湾での国語教育の創始者が熱烈な国家主義者の伊沢修二であり、伊沢の指導のもとで台湾の近代的教育が日本語教育から始まったことは、よく知られている。この出発点がその後の長期間にわたる国権主義的教育の礎になったという考えは、確かなことである（国府種武 1961）。

このような国語教育を研究する視点は、それぞれの専門分野において異なっている。例えば国語学者に見るように、国語教育の果たしたイデオロギー的側面を強調する立場もあるし、また歴史学者のように制度化された学校組織に焦点を向ける立場もある。しかしながら、いずれも現場でどのような教育が行われていたのか、その実体に触れることは少ない。国語教育の理念的側面を強調することはもちろん重要であるにしても、その理念を現地の人々がどのように受容し、あるいは反発し、そしてその理念がどのように人々の日常性に浸潤していったのか、考えてみることはさらに重要である。この問題に接近するには、個々の学校、あるいはその学校を持つ個々の村で、実際にどのように教育は行われてきたのか検討することを必要とする。学校組織を制度的な法制面から取り上げるときにも、同じことが言える。学校教育の当事者の関わり方を欠落しては、植民地教育の問題は制度の変遷を議論するだけの建て前論になってしまう。人々が、とりわけ教育の最前線で暮らしてきた人たちが、植民地支配という抑圧的制度のもとで、どのように国家の政策と関わりながら時代を送ってきたのか、この側面の考察はながしろにできない。

台湾での教育制度は複雑で、大まかに言えば、日本人の子どもは「小学校」、漢族系台湾人は「公学校」、そして原住台湾人は「蕃童教育所（以下、教育所と簡略する）」で初等教育を受けていた。正確に言えば、アミ族など平地帯に住む人たちは「普通行政区域」に住んでいて、公学校に通っていたが、タイヤル族、ブヌン族、パイワン族など、山地、当時の言葉で言えば「蕃界」に住む人たちの居住地は「特別行政区域」と指定され、特別の法体系のもとに管理され、かつ教育を受けていた。その地域の学童が通う学校が教育所であった。山中の村々には警察の派出所、あるいは駐在所が置かれていたが、その駐在所こそ、教育機関としての教育所が

設置されていた場所であり、その駐在所に勤務する教員とは警察官そのものであった。植民地官吏としての警察官は、治安維持に携わるとともに、日本語教育の実践者でもあった。しかも総督府の用意した教育戦略はきわめて巧妙であり、山地の警察官はその代弁者として大いに活躍し、底辺から日本の植民地行政を支えていた。この教育戦略を手がかりとして、原住台湾人に対する日本の植民地統治の独自のあり方を浮き彫りにしてみるのが、ここでの目的である。

## 1 教育所—警察官吏の学校

日本が台湾を領有したとき、大陸からの移殖民としての漢族のほかに、それとはまったく言語・文化を異にする人たちが、すなわち原住台湾人に遭遇することになり、初期の植民地当局は戸惑いを隠せなかったようである。今までに交流したことのない未知の人々ゆえに、原住台湾人への政策はまるで自信のない有り様が目につく。はなはだしい文化的差異のため、その政策も確定したものではなかった。

領有当初、総督府は清国の統治形態を真似て原住台湾人の統治機関として撫墾署を発足させるとともに、教育方面では「台湾総督府直轄諸学校官制」を定め、日本語の教育機関として「国語伝習所」を設立する。これが総督府の教育の始まりである。伊沢修二の発案による国語伝習所は漢族系児童を対象として創設されたが、平地近くに住む一部原住台湾人（パイワン族）も対象とされ、その条文には、「国語伝習所ハ本島人ニ国語ヲ教授シテ其日常ノ生活ニ資シ、且本国的精神ヲ養成スルヲ以テ本旨トス」という内容が明言されている（台湾総督府警察本署 1918：831）。国語（日本語）の授業を通して日本精神の養成という、後の植民地教育の基本方針は領台初期にすでに唱道されていたことになる。しかしながら、明治31年に「台湾公学校令」が發布され、漢族系の教育機関は公学校という名称のもとで着々と組織されていったのに対して、原住台湾人の教育は遅々として捗らなかった。明治33年に各県の殖産主務者の会議が開かれ、教育施設に関する討議が持たれたことがある。このときですら、「高尚ナル人物ヲ養成スルヲ要セズ」として、日常的・実業的な簡易な教育に重点を置くことが提唱されたにすぎない（台湾総督府民政部蕃務本署 1911：422）。

教育所の設立、そして本格的な教育の実施は、総督府の行政組織の整備まで待たねばならなかった。明治34年に、それまでの弁務署が廃止され、原住台湾人の所轄が警務局に移され、新たに警察本署（蕃務課）が教育事項を担当することによって、事情は急変する。明治37年、台湾山中の数カ所に「蕃童教育所」が設置され、ここに原住台湾人への教育が本格化する。興味深いことには、こうした教育所での教育は時の山地行政との関わりのなかで進展していった。例えば、ツォウ族の村にできた教育所（達邦蕃童教育所）の理念は、それまでの狩猟生活から農

耕生活へと生活形態を変えさせようとする総督府の山地行政をそのまま反映していて、教育方針も農業生活で利益を得るための智能啓発を謳っている。こうして学科目も、作法、国語、会話、算術、習字、体操とともに、農業にも重きが置かれていた（台湾総督府警察本署 1918 : 848-9）。

教育所の法整備はやや後追いをし、明治41年になって「蕃童教育標準」、「蕃童教育綱要」、「蕃童教育費額標準」が相次いで定められ、一応の目安がついた。このうち、「蕃童教育標準」には当時の教育政策の基本内容が書かれていて、重要である。そのいくつかの条項を列記してみるだけで、教育目標が分かっていくというものである（台湾総督府警察本署 1918 : 843）。

教育ハ漸次我ガ風俗習慣ニ化熟セシムルヲ以テ目的トシ、學術ノ教育ハ暫ク急務ト為サザルモノトス

授業日数ハ毎月約二十日位トシ、日曜祝日及ビ蕃社ノ旧慣ニ依ル祭日ヲ休暇トス

授業時間ハ毎日五時間位トシ、其二分ノ一以上ヲ耕作、手芸、手工トス

この引用から、同化政策が基本方針であることは直ちに了解される。しかしながら、総督府の姿勢は意外にも及び越しである。学術の教育に重点を置かないとは、農業などの実科教育に比重を置くことを意味していると解釈すれば、納得がいく。しかし休暇を規定した項目は、いささか奇異な印象を与える。各族によって風俗習慣は異なるが、播種祭、収穫祭、成年式、その他の祭儀は当時の台湾では頻繁に行われていたはずで、そのたびに学校が休暇になるなら、実質的な授業時間はかなり減少していたものと思われる。そればかりか、そうした祭儀に配慮しなければならないほどに、総督府の山地教育行政は確立されてなかった、と考えた方がよさそうである。

他方、平地の「普通行政区域」に居住するアミ族、ピューマ族、そしてパイワン族の一部に対しては、別の教育行政が敷かれていた。これらの地域の学童に対しては、明治38年には「蕃人ノ子弟ヲ就学セシムベキ台湾公学校教育ニ関スル規程」が公布され、本格的な公学校制度が開始されようとしていた。この規定によって、就業年限が四年で、修身・国語・算術、地域によっては農業・手工・唱歌を加味した教科目が設定された（台湾総督府警察本署 1918 : 832）。とはいえ、この地域の学童に対する教育もまた、確固たる方法、手段を持ち合わせてはいなかったようである。それがようやく軌道に乗り始めたのは、大正3年に「蕃人公学校規則」が公布されてからである。その第一条は、徳育教育と国語教育の必要性に触れ、かつ生活に必要な知識・技能の教授を掲げている。もとより総督府の教育は同化政策を実施する目的を持っていたから、国語教育に力を注いでいたのも当然である。その第七条では、国語の教授について触れている。曰く、「普通ノ言語・文章ヲ教ヘ、兼ネテ知徳ヲ啓発スルヲ以テ要旨トス。国語ハ、

話シ方ニ由リテ近易ナル国語ヲ授ケ、併セテ仮名、及簡單ナル漢字ノ読ミ方書キ方、竝ニ平易ナル綴リ方ヲ課スヘシ」と（台湾教育会 1939：474-5）。

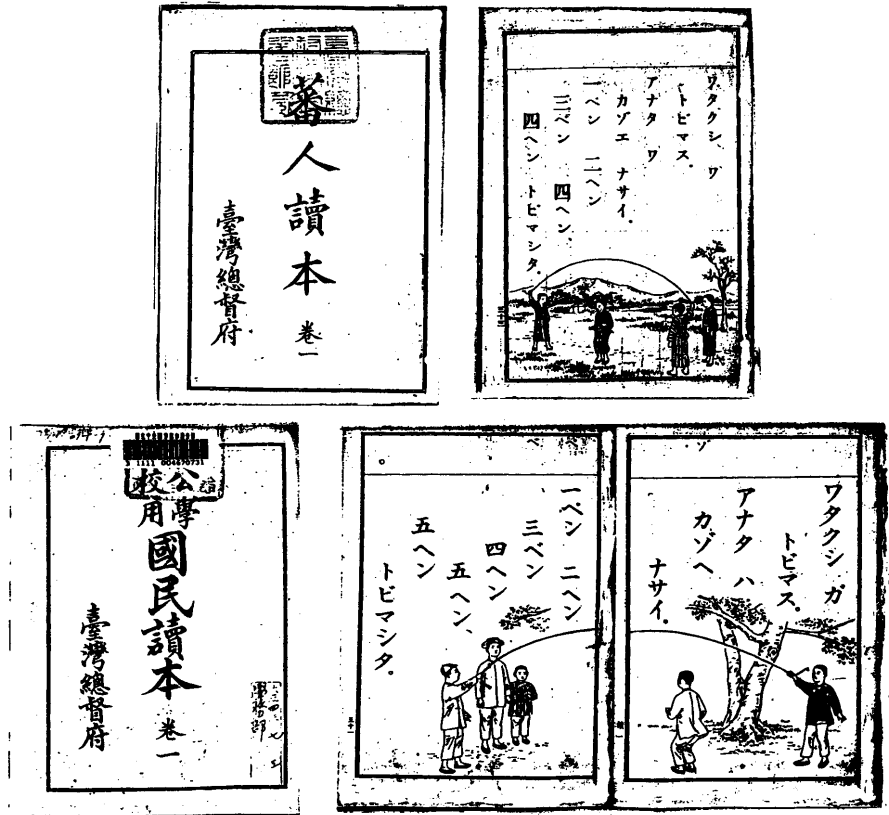
さて、話題を再び山地の教育所に戻すことにしよう。大正期は佐久間総督の山地平定作戦の結果として、日本の支配権が確実に山地にまで及んだ時代であり、警察権力による実効支配が隔々まで展開された時期であった。こうした状況を背景として、各地の駐在所には教育所が設立されていく。たが、内実は教育所ごとにばらばらであった。そこで、台湾総督府囑託の地位にあった丸井圭治郎は、大正3年に『蕃童教育意見書（未定稿）』を佐久間総督に提出し、山地教育の改善を促す。これは意見書でしかないが、丸井の報告書は当時の識者の原住台湾人への眼差しが直接的に語られているばかりか、山地行政の心髓が盛られていて、きわめて興味深い。とりわけ従来の教育所、あるいは教育理念の欠陥が鋭く指摘されていて、当時の行政側の直面する困難が浮き彫りにされている。それと同時に将来の施策を提示していて、その後の行政の動向を考えると、少なからぬ影響を総督府に与えたと判断される。この意味からも、丸井の意見書の主眼点を把握することは、大切である。

この意見書は、第一篇（蕃童教育）と第二篇（蕃童特別教育）からなるが、力点は第一篇にあり、教育所の根本方針、教科目のあり方、教員の配置、経費、教員養成など、多岐にわたり論述されている。丸井の基本的立場を簡潔に言えば、蕃人なる語は侮蔑の意味を持つから「社学校」に変更すべきと説くあたり、彼は開明的植民地官吏と評価される。同化政策の推進者には違いないが、彼の論法は他の官吏の用いる論法とは異なっている。原住台湾人はマレー系統であるから、日本人とも血脈が通じていると言うところからすれば、彼には人類学的興味があったのかも知れない。根拠は明言していないが、性情も日本人に似ていると彼は言っている。それだから、「陛下ノ赤子」として自覚させ、「赤誠ノ日本臣民」にさせることは決して難しくないと説き、日本人へ同化させることが「蕃人教育ノ根本義」と明言する。丸井の言葉で表現すれば、「蕃人ハ異種族ヲ以テ見ルベキニアラズ、吾人ト同種族トシテ之ヲ教育指導スベキナリ」ということになる（丸井圭治郎 1914：21）。この丸井の言説は、初代総督の樺山資紀以来の歴代総督が諭示した「一視同仁」という標語の別の表現にほかならないし、その標語こそ、様々な差異を包み込み、一元的な思考の枠組みに原住台湾人を陥れてしまう甘いささやきであった。この意味で、丸井は樺山精神の継承者であった。

丸井は、国語教育が同化政策の要であるとの認識を持っていたが、さらに踏み込んで教育事情の詳細を把握していた証拠は、日本語の発音にまで細かく苦言を呈していたことから分かる。彼は話し方の大切さを説くが、その時、発音の不正確さを嘆く相手は、彼にとっては原住台湾人だけではなかった。奥羽地方出身の教育所巡査に対しては、「シとス、チとツ、イとエ」との「錯誤多キハ遺憾ニ絶エズ」と、ほとほと困りきった様子で注文をつけている（丸井圭治郎 1914：11-2）。そればかりか、警察官吏の教養のなさも丸井にとっては頭痛の種であった。教育

第一図 教育所用教科書『蕃人読本』（巻一、大正四年：上図）と  
公学校用教科書『国民読本』（巻一、大正二年：下図）。

テニオハの表記法が違うことを除けば、両者の内容はかなり類似している。しかしながら、日本の遊びを描く際にも、公学校用の教科書では子どもは漢族の服装をしていて、公学校児童の生活習慣にそれなりの注意を払っているのに対して、教育所では児童は和服姿で、平地漢族との差異を見せつけている。



所には、教育上の経験がないのみならず、教育の素養さえも欠いている巡査がいる、と彼の批判は辛辣である（丸井圭治郎 1914：45）。教育所の制度化ばかり念頭に置き、同化教育に魂を入れない植民地官吏への憤りが、彼を教育改革へと邁進させたと言える。

丸井の提言内容はいくつかあるが、主眼は全島的に警察官吏の従事する教育所の普及・確立を訴えることにあり、平易、かつ実用的な教育を説くことにあった。丸井はまた、原住台湾人の学力水準に見合う教科書として「蕃童用読本」の編纂を促している。昭和初期まで教育所の教科書として利用された『蕃人読本』が刊行されたのは、この後の五ヶ月先である。「メ」、「ハナ」、「ミミ」から始まって、「アナタ ワ カゾエナサイ。一ペン 二ヘン 三ベン 四ヘン、四ヘントビマシタ」で終わる『蕃人読本』（巻一）は、カタカナによる日本語の読み書きの習得を目指している。この点は当時の公学校教科書の『国民読本』（巻一）と同程度の水準

である。しかし、公学校用の『国民読本』巻二では漢字が教えられるのに対して、『蕃人読本』巻二では教えられることもなく、漢字文化の伝統を持つ漢族の子どもと比べて、原住台湾人の教育内容には手心が加えられていた。原住台湾人の教育には、何よりも会話力の重視が強調されていた。

公学校関係では、大正期に重要な教育法案である「台湾教育令」（大正8年勅令第1号）が公布され、漢族の通う公学校の修業期間が6年になり、さらに大正11年には勅令第20号として新たに「台湾教育令」が公布され、漢族の子どもが日本人の小学校に通学できる機会が設けられた。平地漢族に対する国語普及活動は大正末から昭和に至り活発化し、全島規模で組織的に日本語を普及させる政策が実施されていく。大正3年に「全島国語演習会」が開始されて以来、しだいにその政策は熱を帯びてくる。「国語普及施設選奨」（大正13年）、「国語普及功労者表彰」（同15年）、「国語普及ラジオ放送」（昭和5年）、「国語普及功労者内地視察派遣」（同5年）、「国語普及読物刊行」（同5年）、「愛語章の授与」（同7年）、「国語普及唱歌作成宣伝」（同8年）、「国語講習所指導員講習会」（同9年）と続く一連の歩みは（井出季和太 1937：959）、全島的に展開された国語運動の高まりを如実に反映している。

教育所でも、昭和3年に「教育所に於ける教育標準」が発令され、教育所の整備充実が図られるとともに、日本語普及は組織的に推進されていく。その「教育標準」では、明確に教育所の存在理由が規定され、名実ともに教育所を通しての同化政策は体制を整えていく。その第二条では、国語を習得し、善良なる風習に慣れ親しみ、生活上の知識と技能を授けることが教育所の目的だと謳い上げたうえで、第十一條で次のように国語教育の意義を力説する（台湾教育会編 1939：492）。

国語ハ普通ノ言語・文章ヲ知ラシメ、正確ニ思想ヲ発表スルノ能ヲ養ヒ、兼ネテ知徳ヲ啓  
發シ、特ニ国民精神ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス。……

国語ヲ授クルニハ、常ニ其ノ意義ヲ明瞭ニシ、又発音及語調ヲ正確、流暢ナラシメ、且其  
ノ用法ニ習熟セシメンコトヲ務ムヘシ。

国民精神の涵養を目的とした国語教育は、今やこうして制度化された。発音や語調、そしてその用法も正確であることが児童には要求され、日本人としての体面を保つべく学校教育は進展していくことになった。しかしながら、昭和初期の教育所は四学年制であり、時代の進展は年々、密度の濃さが求められていたので、この四学年制では教育の実が得られないとの批判が遠からずして巻き起こってくる。折しも台湾では生活改善運動が始まりかけていて、教育所をその尖兵として利用する機運も熟しつつあった。その修業年限にやがて2年間の補習科を上積みし、そしてその後、最終的には六学年制に至るまでには昭和18年度まで待たねばならなかつ



たが、総督府はこの機運をみすみす逃すほどの貧困な施策家ではなかったし、惰眠をむさぼってはいなかった。

日本の台湾統治でもっとも独創的な政策は、公的な教育制度と重ね併せ、多様な補助施設を作り上げたことである。平地と言わず山地と言わず、国語教育の完璧さを築き上げるには、当時の学校組織だけでは不十分であった。年寄りの多くは日本語教育を受けていなかったし、若者といえども百パーセントの就学率にはほど遠い現状は如何ともしがたかった。この状況を改善するために、公的な制度だけでは不足と悟った総督府は、教育施設の多重化を図り、国語教育の網の目を張り巡らす政策を実施する。こうして、公的学校制度とは別に、しかしそれを補完する意図をもって、「国語講習所」、あるいは地域によってはその他の名称で呼ばれる教育施設を各地に設置していく。

## 2 台湾総督府の戦略

台湾総督府は領台の初期から教育問題に直面していたが、原住台湾人を対象とした学校教育は、治安の問題もあり、一筋縄では展開しなかった。だが、警察の管轄する領域として学校制度が確立されていくと、直接的に植民地支配機構の中核をなす存在として重要性を帯びてくる。その機構の末端部に位置するのは、警察官吏、とりわけ各村に置かれた駐在所の警察官であった。この警察官吏の仕事抜きにしては、植民地教育の実態は語れない。ここで問題にしたいのは、こうした警察官吏の果たした役割であり、彼らの仕事を通して、日本の植民地統治はどのように展開したのか、考えてみることにある。

丸井圭治郎による『蕃童教育意見書』が時の台湾総督に提言された大正3年頃は、多くの原住台湾人の学童が学んでいた学校、つまり教育所の普及はさほどでもなく、その実数も多くはなかった。しかし、それ以後の充実ぶりは徹底していて、昭和期になるとたいていの村の駐在所には教育所が設置されるようになる。大正3年時の教育所は全島に51、就学児童数は955人だったが、大正9年には103になり、児童数も2179人になり、そして昭和10年にはその数も183に登り、児童数もまた8291人と急増している（台湾教育会編 1939：505-6）。

教育所での教科内容も昭和期になると整備され、すでに紹介した昭和3年の総務長官通達による「教育所ニ於ケル教育標準」では細かく規定されるに至っている。その規程によれば、教科目は修身、国語、算術、図画、唱歌、体操および実科とし、修業年限は四年と定められている。後に補習科という名称で2年間の上乗せが定められたが、その法令では毎週の授業時間数、学年毎の教授内容、学年度、休業日、式日などが取り決められていて、制度上は公認された学校教育の一翼を担っていた。ちなみに言えば、第四学年の毎週教授時数は男24時間、女26時間

であった。そして理念的なことを言えば、いずれの科目も「徳性ノ涵養ト国語ノ習熟」とに留意することが謳われている（台湾教育会編 1939：490-98）。

学校教育での国語の占める比重はかなり高いが、それに比例するかのように、実際にも国語の習熟に熱意を込めた先生は少なくはなかったようである。学校内で現地語を話せば先生からピンタを食らったという話は、今なお各地でよく聞けるので、日本語を叩き込む教師の執念はもの凄かったと言わねばならない。学校教育のもう一つの特色は、実科という名称で実益的な教科目、例えば農業などを教えていたことである。たいていの学校には農園が置かれ、生徒たちは野菜などの栽培の指導を受けていた。その収益は学用品などの購入に充当していたのだが、実益的教育の重視はこの時代の特色でもあった。

もちろんこのような日本当局の政策が初期の段階から首尾よく浸透していったわけではない。その一つの理由は教員たる警察官吏の知的水準にあり、いくら生徒の知性の涵養といっても、教員の知的水準が低ければ、植民地教育は成功しない。この警察官の質は、総督府にとって重大な問題であった。実際に、初期の頃は山地で働く警察官吏の教員には経験の浅い者が多かったようである。ある教員は過去を述懐して、『蕃地教育』という文集でこう述べている（伊藤生 1935：5）。

大正12年頃の教育担任者の経歴は話を聞いて私が知って居る範囲内に於ては現在の様に内地其他に於て教育に経験を有する人は少なく、従って小・公学校教員の資格を有する様な人は極めて少なかった様であった。それで当時担任者選定の標準は先ず経験の有無、若しなければ彼の男は少し気が利いて居さうな位なことではなかったかと想像する。

多少の小利口な人間を教員に仕立てるとはいいい加減さもはなはだしいが、この反省の弁が語るように、大正期の警察官の水準の低さは否定できなかった。もっとも、山地に勤務する警察官は、甲種警察官と乙種警察官との二種類に分けられ、このうち乙種は前者を補佐する職種で現地採用であったが、甲種は正式の採用試験で合格し、台北の総督府教官練習所で一定期間の訓練を受けたから、それなりの経験者ではあった。しかし、全体的に質の悪さは昭和になってもしくは改善されなかったようで、その証拠に教員の質の低さを嘆く声が、お膝元の総督府警務局から聞こえてくるほどである。とりわけ僻地の山村では、巡査勤務の余暇に、一言二言の日本語を教え、後は庭掃きや薪拾いに児童を使うという程度の低い教育所もあった（鈴木質 1928：50）。

このような事態を改善し、採用した警察官の質を向上させるため、大正末から総督府は毎年定期的に、二週間から一ヶ月ほどの期間、各地から巡査を順番に集めて各種の講習会を催していた。その講習の内容も実に広範囲にわたっている。山地勤務の警察官について言えば、例え

は昭和元年には「蕃地警察医務講習」が持たれている。その講習科目は基礎的生理学、内科、伝染病、寄生虫、眼病、そして分娩時の処置などであった。無医村では医療行為も警察官の業務の一つであり、回虫駆除、トラホーム治療、あるいはマラリア対策など、衛生管理の多方面にわたる知識の習得は必須であった。時を置いて「蕃地授産講習」も開かれ、土壌、肥料、作物各論、園芸、そして病虫害や畜産の講習が持たれた。そして「蕃童教育担任者講習」も行われ、教育学、各科教授法、児童心理、唱歌・遊戯の科目が授けられた（台湾総督府警務局 1934：728-30）。こうした一連の講習会の開催は、山地の警察業務はきわめて多方面にわたっていることを示していて、それだけに総督府も警察官の質の向上には十分な対策をたてざるをえない現実があった。

しかしながら、初期の段階で当初のもくろみ通り教育所が機能しなかったのは、それが現地の人々に馴染みがなかったという単純な理由にもよっている。教育所の設立を前にして、村人たち、とりわけ老人たちの日本教育に対する戸惑いや抵抗は至るところで聞くことができる。先の『蕃地教育』には、引き続いてブヌン族の例として、老人たちの日本教育に対する恐れや反発の感情が紹介されている。高山に住むブヌン族は頑強に日本の統治に抵抗していたが、政治的に日本との和平が達成されてからも、日常生活での日本への不信感はしばらく続いていた。教育所と子どもをめぐる駆け引きは、今となってはユーモラスに聞こえるが、その当時は真剣そのものであった。以下は、教育所の先生の語る、その時代の話である（伊藤生 1935：6）。

日本（官憲を指す）は吾等の大切な子供を依頼せぬのみならず、嫌だと反対するのも聞き入れず無理無体の子供を引張って行った。日本は教育にことかけて子供を日本に連れて行って仕舞う魂胆であるまいか。或は父兄が日本に凶行せぬ様に子供を人質にとって居るのではあるまいかと考へて居るものは相当ある様であった。

教育は必要だ、必要だと云うが、何も吾等ブヌンには教育も何も必要なことはありはしない。教育所に出して学問をさせたとして一銭の金にもならぬではないか。子供でも家に置いて働かせたら少しは親の助けとなるから、出来るだけ就学に反対し、若し就学の已むなきとせば、名だけは出すも後は欠席せしめる方法でゆかうとする。此の考えは父兄一般のものであった。

大正期には、日本への不信とともに、子どもたちに学問は不要とする考えが充満していたため、学校教育は徹底していなかった。日本の官憲はこうした世代の老人に対してはかなり強引な方法を取り、親の意志を無視してまで子どもたちを学校に通わせた。あるいは、子どもに砂糖やマッチをあげて教育所に引きつける手段に出たこともあった。その飴と鞭の使い方は涙ぐましいほどである。昭和初期でさえ、先生がちょっと怒ると、ぷいとした態度で川へ魚取りに

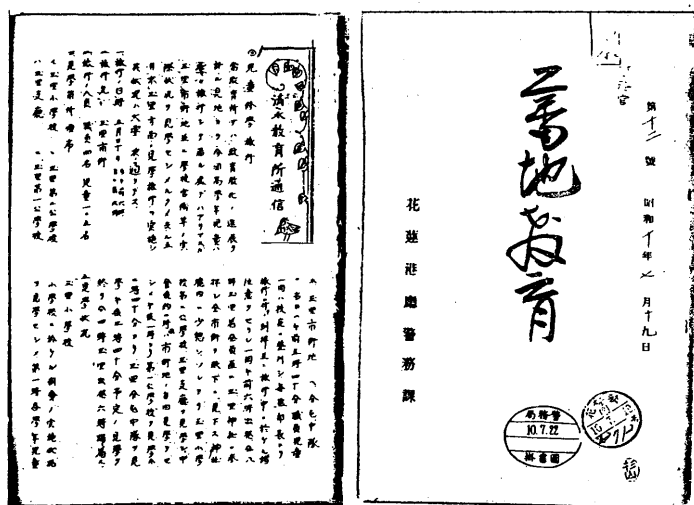
行ってしまう児童がいて、手を焼くことさえあった（辻信治 1941:4）。こうした時代を経て、やっと子どもを学校に馴染ませる時代が続く。学校の教科には「唱歌」や「遊戯」の授業があったが、例えば学校は歌う所という錯覚を植え付けることで、子どもを教育所に引きつける作戦に出る場合もあった。皇民化政策が実施される昭和10年代に至るまでには、学校教育の成果を上げるための努力を教育所当局は必死に試みていたのである。

親たちの抵抗も少なくなり、子どもも教育所に慣れてきてその活動が軌道に乗ってくると、教育所は名実ともに山地社会での中核的存在になることができた。児童たちは、授業で『蕃人読本』を高唱し、やがてその日本語の声は日常生活でも広がっていく。こうして、日本語教育を進める総督府の政策は決定的な勝利に向かっているかに見えた。しかしながら総督府は、制度の確立のみで、意図する支配が貫徹できると考えるほど、甘い考えの持ち主ではなかった。当時の状況は、児童を除けば、老人など多数は日本語が分からなかったし、日本語学習も最終的には「日本精神」を植え付ける手段であるなら、型どおりの授業で終始するわけにはいかないことくらい、総督府はよく心得ていた。植民地支配の暴力的支配とは、何も敵対者を処罰する荒療法だけに見られるのではない。人々に呪縛をかけ、その心の奥深くに入り込み、無意識のうちに統治政策を脳裏に刷り込む方法こそ、究極的な暴力支配である。総督府はこうした洗脳政策にどうやら長けていたようである。村中を、そして台湾中を日本語学習のるつぽに巻き込み、熱狂的な狂乱状況を作り出すこと、総督府の戦術はまさにこれであった。

そのため総督府は、日本語使用を徹底させるための多様な仕掛けを準備していた。教育所の顔は多面的であり、総督府が推進した教育は、特定の科目を教授し、年限がくれば卒業させ、以後は無関係という無味乾燥したものではなかった。教育所をすべての村人との交流の場にする、これが総督府の第一の作戦であった。卒業後の学童たちとも交流を続け、教育所に通ったこともない高齢者を含め、すべての村人たちとも特別なつながりを維持すること、この任務が教育所には与えられた。日本語学習の特別のお膳立ては、こうしてできあがった。教育所の施設を利用した特別学級作りに精を出す環境が、こうして準備された。その特別学級とは「国語講習所」であり、それはまた「国語普及会」、「夜学会」とも呼ばれた組織であるが、植民地官吏はその組織を通して国語普及に全力を注いでいくことになる。このような重層化した組織の形成こそ、台湾での日本の植民地教育の特色であった。

国語講習所とは、教育所に付置され、その補完的役割を担った施設である。当然、そこに勤務する警察官が教育の任務に当たるが、とりわけ日本語の会話能力に劣る人たち、例えば年寄りなどに日本語を教える目的で設立された学習の場である。残念なことには、国語講習会の生の動静を伝える資料はきわめて少ない。総督府警務局理蕃課は統治政策の啓蒙を図るため、定期刊物物として『理蕃の友』を発行していて、そのなかで国語講習会の活動の記事もかなり取り上げている。その記事を読んでいくと、統治政策の観点からその実態を伝える内容も散見し、

第二図 『蕃地教育』の一部



警察官吏や学童たちの生々しい声を聞くことができる。ただし、この雑誌は総督府の中樞から出版されている以上、たとえ原住台湾人の声が載せられていても、それは検閲を受けた記事であるから、どこまで現地の声を反映した内容か、躊躇は残る。警察官自身の発言にしても、中央に顔を向けた宣伝臭さが残り、公式的内容が目につきすぎる。しかし幸運なことに、花蓮港庁（現・花蓮県）の教育関係者はよほど教育熱心であったとみえ、教育所の動向を伝える内容の、いわば文集の寄書さとも言うべき記事をガリバン刷り形式で残していた。それは、花蓮港庁警務課理蕃係の発行による『蕃地教育』で、昭和9年6月に第1号が刊行され、以後、定期的に発行された。この文集の多くの執筆者はその地域の教育所の先生で、総督府の支配機構の末端でどのような教育がなされていたのか、植民地官吏の生の声を聞くことができる。

昭和初期の地方行政組織は、総督府の下に五つの州（台北、新竹、台中、台南、高雄）と三つの庁（花蓮港、台東、澎湖）があり、その下部組織として郡や支庁があった。『蕃地教育』に登場する地域は花蓮港庁であり、その傘下の支庁である。花蓮港庁は台湾の東海岸に沿って延びていて、その住民の多くは平地帯に住むアミ族で、「普通行政区域」に属するためアミ族児童の通う学校は公学校であった。しかし総督府は、昭和期になって山岳地帯に住むタイヤル族やブヌ族を平地帯にすぐ隣接する山脚地帯に移住させた。同じ花蓮港庁の管轄範囲ではあったが、その一帯はいぜんとして「特別行政区域」に指定され、そこの児童は教育所に通っていた。『蕃地教育』での記録は、この移住で成立した両族の村々の教育所の動向についてである。

とりわけ『蕃地教育』では、教育所の一般的活動とともに、国語講習所、あるいは国語普及会（夜学会）の実例が取り上げられているのに注目される。例えば、タイヤル族の一支派、サデック系統に属すタッキリ村の教育所が精力的に国語普及を目指して活躍していた様子は、そ

の印刷物の投稿記事から読み取ることができる。昭和10年当時、戸数が123戸のこの村では、この教育所に通う児童は男39人、女21人で、その出席状況は96.45%の高率を誇っている。教育所教員は駐在所の警察官吏の3人が兼任していて、この3人で全学児童の面倒を見ていた。前年度、つまり昭和9年度には、この教育所は2回の「父兄召集」と8回の「家庭訪問」を果たしていて、家庭と教育所との交流が密になるよう図っていた。修学旅行は2回、運動会は1回行い、課外活動として児童の訓練、例えば「訓練演習」を32回、「国語練習会」を35回を行ったほか、「大清潔法」を17回実施し、また「見学旅行」を2回行っている。当時行われていた「大清潔法」とは、いわば大掃除のことで、便所、流し場などの浄化、鼠取り作戦を含んでいて、村落生活の衛生面がことのほか重視されていたのが分る。この他にも、農業実習にも力を入れ、馬鈴薯、陸稲、落花生、蔬菜などの栽培にも取り組んでいた。収穫はいずれも売却し、卒業式の記念写真代などに充当していた。

ここの教育所の仕事は、さらに卒業生や村人全体に対しても向けられ、「夜学会（国語普及会）」を組織し、「青年団」の指導にも当たっていた。この「夜学会」こそ、昭和期、とりわけ皇民化政策が叫ばれていた時代の、総督府の植民地教育の政策を演出する主役そのものであった。夜学会とは、国語普及の目的で組織された勉強会で、学童の授業が終わった後、夜の1時間ほど開催されるのを常としていた。農閑期の利用という状況のもとでは短期間にならざるを得なかったが、学童のみならず、村人が一丸になって日本語を習得し、併せて「日本精神」を体得する仕組みの一環として組織された夜学会は、たいていの村に置かれ、日本の植民地教育の一つの局面を現出していた。

タツキリ教育所の日本語普及活動は、『蕃地教育』（10号）に記録として残っている。国語普及会は、昭和9年10月1日から12月20日までの81日間にわたって開講されている。教育所四年では不足と見た総督府は、卒業生にも再度の学習を呼びかけ、いっそうの学力充実を図っていたので、その卒業生も参加している。受講生は教育所卒業の甲組（男28人、女18人）と、その中途退学者及び未就学者の乙組（男22人、女12人）に分かれ、別々に参加している。国語を中心とし、付随して修身、算術、農業、唱歌を科目とする授業は、決して水準の高いものではなく、初心者向けの簡易な内容の域を出ない。それでも、正規の児童教育を補完する授業として位置づけられたこの学習会への出席率は9割を越していて、総督府が鼓舞する国語学習熱を側面から支えていた。日本の植民地教育は、このような裏方的な努力を積み重ねていき、国語普及のためとあらば、このような木目の細かい手法を採用していたのである。

同じタイヤル族のグークツ村教育所での「国語普及会」もまた、めざましい活動をしていた。この村の「国語普及会員夜学会」は、農閑期の10月から翌年の2月までの長期間にわたって設けられ、国語普及のための授業が行われていた。教育所卒業生を対象とした甲組と、未就学者を対象とした乙組に分かれて実施した授業への出席状況は、平均91.37%であった。その目的

は、やはり全科目を通じて精神的諸訓練を施し、国語指導を行うことにあった。終了式には、甲組の国語演習会が持たれ、受講生は鍛え上げられた日本語の弁論大会で成果を披露した。

グークツ教育所での活動はこれだけに留まらない。さらに「隔日夜学会」が設けられ、これには25歳以下の青年（男22人、女16人）が参加していた。夜学会開催の農閑期を除き、年中無休で二日おき、夜の7時半より一時間ほど、5人の警察官吏によって修身、国語、算術、理科、そして農業、唱歌遊戯、体操、図画、手工が教え込まれた。この教科課程を実施する当教育所の目的は、著しく教条的である。『蕃地教育』11号（昭和10年6月15日）には、次のような謳い文句が書かれている。すなわち、「学科のみに重点を置かず、寧ろ日常社内に発生したる事項を批判し、是非善悪の理を説き、その他蕃情通報、理蕃の友、新聞雑誌等の教化上、好資料と認められるものを摘示し、訓話、注意、称揚、訓戒等をなし、精神的改造と共に国語普及に精進す。」

教育所が児童に対する知育教育の場というよりも、総督府の植民地経営の尖兵としての役割を負っていたことは、このグークツ教育所の例からすぐ分かる。精神訓話自体は陳腐な内容であったのかも知れないが、蜘蛛の巣のように教育網を張り巡らしたうえで、日本語習得が位置づけられ、その目標に向かって警察官吏は日夜の奮闘よろしく児童や村人と接していた。日本教育を受けた古老は今なお日本語が達者だが、その背景にはこうした植民地経営の技法とその網の中で働く警察官吏の努力があったわけである。こうしてみると、植民地経営の最前線で働く警察官吏の仕事抜きにしては、日本の植民地統治の実状は理解できないことになる。

教育所の仕事はこれだけに留まらない。時として卒業生のみを対象とした、夏期の短期間の「同窓会短期講習会」、あるいは「卒業生短期講習会」も開催された。それよりもいくらか長期にわたるが、「自覚アル国語常用者ヲ養成」するために、卒業生を対象とした「卒業生長期講習会」も地域によっては開かれていた。こうした講習会には、それぞれの地域性を重んじ実益を目的としての開催例もある。稲の草取り、落花生栽培など農業技術の指導を目的とした「農業講習所」、卒業生の女に対して裁縫、料理を教え込む目的で開かれた「家政講習会」、助産婦養成と衛生思想の普及を目指した「助産婦養成予備講習」などは、広く各地で開催されていた。いずれも日常的な用途に応じた活動であり、しかも事のなりゆき上、警察官吏の伴侶も動員しての取組みであった。

教育所はまた、卒業生を中心として組織された青年団とともに、村人の健康管理にも携わっていた。『蕃地教育』8号（昭和10年2月2日）には、そうした活動が報告されている。例えば、タガハン教育所では「健康調査」が行われていた。そこでは、一般村人の健康調査として眼病、伝染生疾患、消化器病疾患の検診があったし、教育所児童に対しては身体検査が実施され、眼病、虫歯、検便検査が行われていた。玉里に住むブヌン族のバネタ村では、教育所に付属する組織として村の長老から成る「役員会」が結成されていて、その会議では一戸も余さず便所を

設置することを決議している。さらには、その教育所では自作野菜園の設置、共同風呂の設置、共同豚舎新設、牛舎設置など、環境衛生の仕事にも携わっていた。教育所の仕事とは、それはまた警察官吏の仕事と言い換えてもよいが、このように生活全般にまで及んでいる。国語教育を推進するにあたっては、このように生活環境全体を整備することが平行して行われていた。日本の植民地当局が企てた同化教育とは、単に皇民化を謳い文句にした理念の注入には留まっていなかった。その末端機構が手掛けていた業務とは、生活構造そのものの近代化であり、これを背景としての同化教育であった。

### 3 日本語狂乱—国語演習会の競演

日本への同化を図る目的で、台湾総督府は実に多くの日本の制度を台湾に導入した。例えば、明治期の日本で国家行政の末端組織として結成された青年団は、台湾の山地でも教化団体の一つとして導入された。しかしながら最近の宋秀環のアミ族の研究を見れば、その導入は十分に成功したとは言い難いようだ。アミ族には独自の年齢組の制度があり、きめ細かく分類された年齢組のいずれかに村人は属し、村落生活での役割を担っていたので、一見すると、この年齢組は官製青年団組織と適合的に思える。ところがこの人々は、大別するとマトアサイ（老齡）とカパツ（若者）とのいずれかの世代範疇にも分類されていて、村落生活の中心を決定する祭祀的・精神的指導面はマトアサイが掌握していた。この点に着目した宋秀環の主張は、次のようである。すなわち、日本の肝入りで登場した青年団を通してカパツは警察組織と結びつき、その職務を遂行したが、カパツ自体がマトアサイの支配下に置かれていたため、警察組織はマトアサイが管轄する村落生活の中枢には踏み込めなかった、と言う（宋秀環1995）。

年齢組の組織が日本への同化政策の浸透を阻んだという宋の見解は卓見と思う。しかしながら、アミ族の母系制の解体が、戦後の長い期間にわたり多様な要因のもとで展開されたとはいえ、若者に男系思想を植え込もうとする皇民化政策にも遠因があったと考えれば、植民地統治政策は、その抑止力ともなった年齢組の存在にも関わらず、着実に潜行しながら進行したと見るべきである。ただし、宋秀環の論点を追っていけば、独自の年齢組制度を持つアミ族と、ブヌン族やタイヤル族など他の原住台湾人社会とでは、警察組織と青年団との結合を通しての日本化の動きに、明らかな違いが出てくると予想される。実際に後で見るように、ブヌン族などでは若者の生活改善運動への荷担が著しい。

今一つ、日本化への手段として総督府が導入した組織として、かつて日本の農村に広く見られた「実業補習学校」を考えておく必要がある。日清戦争以後になって全国的に普及したこの組織は、昭和期になって「青年学校」へと格上げされていったが、明治期には、小学校卒業後



の勤労青少年を入学させ、修身、国語、算術、実業を学習させる学校として、小学校教育の補完機能を果たしていた。後に「思想善導」に手を染めるこの学校は、国民国家の成立とともに知的水準の向上を望む一般人の期待を背負って、基礎学力の補強、道徳の修養、農商業などの実学尊重を目指して努力していた。学力エリートの道を辿らなかった一般人は、多くはこうした制度のなかで教育を受けていった（鷹野良宏 1992）。

台湾での国語講習会が、日本本土での「実業補習学校」の輸入代替物であったとは簡単に言えないにしても、その両者の性格はほとんど同じである。そうしてみると、さきの青年団の導入といい、総督府は植民地統治に当たって様々な日本の制度を台湾に取り込んでいった様子が見えてくる。この国語講習会が置かれていた教育所の重大な任務が、日本語を徹底させ、それを通して皇国臣民を育成することにあったのを想起すれば、台湾は日本での教育の再処理場であったとさえ言えてくる。その教育所は機会をとらえて、日本語の上達を図るための動機付けを模索していた。日本の小学校でよく行われる学芸会を台湾山地にも持ち込み、生徒に自発心を起こさせ、互いの競争意識を刺激しながら日本語の上達を狙ったりしたのも、その一つである。挙げ句の果てに、その応用編として「国語演習会」という名の日本語弁論大会がもくろまれ、機会を見つけては様々な規模で実施された。ある場合は学校単位で、別の場合は郡や支庁、県や州などの地方行政単位で、互いに競い合う形式でこの演習会は行われた。

総督府が統治対策のために出版した定期刊行物の『理蕃の友』には、皇民化政策が高揚期を迎えた時期の国語演習会の模様が、毎月のように掲載されている。「皇民化——軍国調豊に／各地が競う国演の盛観」と題した昭和14年3月の記事は、表現からして厳めしさが漂うが、タブロイド版8ページのうち3ページを費やして各地の有り様を紹介していることから分かるように、国語演習会を重視する当局の姿勢が浮き彫りにされている。台北、台中、台東、花蓮の主要都市では相次いで国語演習会が開かれ、この時とばかりに生徒たちは日頃の練習の成果を競い合った。各州の知事や高級官吏が出席し、国旗掲揚、皇居遥拝、教育勅語の奉読から始まる演習会は、植民地当局が演出する大がかりで、しかも厳粛な儀式そのものである。台北の会場では、「兵隊さん」、「旗行列」、「支那事変と我等の覚悟」などの日本語演題が発表され、台中では、「軍国山のある朝」と題した会話劇も登場し、さながら軍国日本の世相を映し出していた。この発表会の合間をぬって、唱歌、剣舞、寸劇なども催され、いっそうの雰囲気醸し出した。

州単位の行政組織のうちでも、花蓮港庁の国語演習会の歴史は古い方で、昭和6年に開始され、以後は毎年続けられていた。生徒が日本語の作文を発表する国語演習会は、小規模なら学校の学芸会でも行われ、あるいは数地域（村）の共催でも行われたが、一番高揚した雰囲気醸し出すのは、多くの要人が列席して儀式張って行われる州単位での開催である。花蓮港庁が主催する演習会は、この意味で村の学校で行われる発表会とは雲泥の差がある。この時には各

教育所の児童代表が、さしずめ競技大会に馳せ参じるように集まり、吹き上げる熱気のなかで日本語の表現能力を競いあった。『蕃地教育』には、その実例が事細かく記録されている。ここでは、昭和10年2月に花蓮港庁全域の教育所が集まって行われた国語演習会の模様を、『蕃地教育』10号（昭和10年2月12日）に即して再現してみよう。それは、いくつかの舞台を駆け登りながら、そして各種の催しを付随的に伴って行われた。

まずは、花蓮港庁での全体的な発表会に先立って、花蓮港庁を構成する五つの支部の一つ、研海支庁で「国語演習会」が開催された。それには、当支庁に属す27の「国語普及会」が参加した。発表会にはそれぞれの教育所から代表が立ち、団体成績と個人成績とを競う形式で行われた。その後で唱歌、遊技を各普及会ごとに競い、引き続き優秀な生徒52名には褒賞として「国語章」を授与した。

翌2月13日、花蓮港庁主催の「修学旅行」が催され、生徒たちは汽車で精糖会社を見学する。始めてみる工場、それに汽車などの文明の利器に接して、児童は一様に感嘆の声をあげ、帝国日本の偉容に驚異の眼差しを向ける。曰く、「汽車ニハ始メテ乗ツタガ、自動車ヨリ乗り心地良カッタ。」あるいは、「砂糖製造所ハ始メテ見タガ、機械ノ大キイノト、沢山ノ砂糖ガー一時ニ出来ルノニハ驚キマシタ。」自分の生まれた村から外に出たことのない児童は、こうした体験を通して文明への憧憬の念を植え付けられることになる。引率者の警察官吏にとってみれば、こうした驚嘆の声を上げさせることが修学旅行の目的であってみれば、そのもくろみは成功したことになる。こうしてある引率の警察官は、文明の勝利に陶醉した揺るぎない自信をのぞかせて、こう言う（著者不詳 1935 : 9）。

交通機関ト文明機業ノ発達ヲ彼等蕃人ニ直視セシメ、日進月歩ノ現在ヲ幾分感ゼシメ、奥地蕃人ノ生活ト比較対照シ得タルハ、教化指導上其ノ効多カリシ事ト思フ。

この旅行はまた、教育所での実学的教科の指導を行うに当たって、警察官吏に自信を深めさせたようである。引率のタツキリ教育所の一警察官は、「文化の促進、時代の趨勢を省みるの機会を与え、实际的教材を得た」と語り、「甘藷の栽培を奨励し、——知識を博め猶将来農業に精励せし」めたことの成功を信じて疑わない。演習会に付随して行われた修学旅行は、結局のところ、未開性を卑下させ、文明社会の優越性を信じ込ませることに、その目的があった。その警察官は満足げに自画自賛して、こう言う。「文明の進歩は長足なることを知らしめ、蕃社の実状と照合して反省するの機会を与え」た（松村生 1935 : 17）。

この行事の目的の日は2月14日であり、その日には花蓮港庁主催の「国語演習会」が行われた。朝、児童一同は花蓮港神社で必勝祈願をした後、会場に赴き競演に参加する。競演は、教育所児童の部と国語普及会員の部と二部分かれ、前者の場合、一つの教育所を代表して3人

第一表 国語演習会の成績表

『蕃地教育』9号(昭和10年)所収の「第五回国語演習会成績表」の一部。成績は、「教育所児童ノ部」,「国語普及会員ノ部」,「支庁別成績」とに分かれて採点される。この表では、「教育所児童ノ部」の一部のみ掲載した。

海 研																				支 廳 名
計 平 均	平 均	四 四	二 九	一 四	平 均	三 六	二 一	六	平 均	四 〇	二 五	一 〇	平 均	四 二	二 七	一 二	平 均	三 九	二 四	九
		ク	ク	ブセガン		ク	ク	合 流		ク	ク	タ ビ ト		ク	ク	バ チ ガ ン		ク	ク	ソ ワ サ ル
		イ ヤ ン ウ イ リ	イ ヤ ン ガ ッ シ リ	バ イ ダ ン ワ タ ン	リ ベ フ タ ロ	ロ ヤ ン ハ ロ ン	イ バ ン バ イ ダ ン		シ ョ チ ン ワ タ ン	タ イ ン ワ タ ン	ラ ウ チ ン ウ ミ ン		シ ョ チ ン ア ビ ス	ラ ピ ン ワ ッ チ	ハ ッ パ イ ハ ロ ン	イ ヤ ン ラ ハ ン	ワ タ ン ラ ウ シ ン	ト ラ ク ア カ ン	ク ラ オ ピ サ オ	ウ イ ラ ン ハ ロ ン
																				ベ ホ ウ イ ラ ン
																				パ ッ サ ン ハ ロ ン
																				ト ッ バ イ ア ウ イ
	八 五	八 〇	九 〇	八 五	七 三	七 〇	七 〇	八 〇	七 五	七 五	七 〇	八 〇	七 一	七 五	六 五	七 五	七 〇	八 〇	六 〇	七 三
	七 六	八 〇	八 〇	七 〇	五 六	六 〇	六 〇	五 〇	六 八	七 〇	六 〇	七 五	七 五	八 〇	七 五	七 一	八 五	六 〇	七 一	七 五
	八 〇	七 五	八 五	八 〇	三 一	三 五	三 〇	三 〇	六 六	六 五	六 〇	七 五	七 〇	七 五	七 〇	六 八	七 〇	六 〇	七 〇	七 五
	七 三	七 〇	七 五	七 五	五 一	五 五	五 〇	五 〇	七 六	七 五	七 五	八 〇	六 八	七 〇	六 五	七 〇	七 五	七 五	七 〇	七 〇
	九 五	九 〇	九 五	一 〇 〇	四 八	五 〇	五 〇	四 五	八 〇	八 五	七 五	七 六	八 〇	八 〇	七 〇	八 五	九 〇	八 五	八 六	八 五
三 五 五	四 一 〇	三 九 五	四 二 五	四 一 〇	二 六 一	二 七 〇	二 六 〇	二 五 五	三 六 六	三 七 〇	三 四 五	三 八 五	三 六 一	三 八 〇	三 五 五	三 六 三	四 〇 〇	三 三 五	三 七 〇	三 六 五
	3	一 二	三	五	15				7			一 五	11	一 九		7		九	6	一 六
																				一 八
																				一 三
																				順 点 得

の児童が演壇に立ち、卒業生を中心とした後者の場合は、その会の代表2人が立ち、それぞれ日本語の発表能力を競い合う。審査の対象は「態度」、「発音」、「内容」、「語調」、「構想」の項目にわたり、各項目が百点満点で採点される。その結果、児童本人の個人成績、教育所単位の前平均点、それに各支庁別の成績、と三段階に分かれて順位が定められる。

発表の題目、発表時間などの記録がないのは残念であるが、第一表の「第五回国語演習会成績表」を一読すると、それでもいくらかの雰囲気は読み取れる。この発表会では、採点に当たって発音や語調が重視されていることが大きな特徴である。先に触れた丸井圭治郎の『蕃地教

育意見書』では、教育所教員自身の方言なまりを指摘する辛口の批判があったが、その後の教育所ではこの点の是正が行われたのかも知れない。教育所の児童の部では、全体的には発音に関しては、そこそこの域に達している。それに対して、内容や構想の点では教育所毎の格差が見られる。たぶんこの相違は、児童の発題能力の差異とともに、教育所教員の指導の仕方にも原因がありそうである。

例えば、マホワン教育所では12月の学期末に学芸会を開催したことがある。この時とばかりに、一年生から三年生までの児童は唱歌・遊戯や話し方に一日中、興じた。「夕焼け子焼け」や「カナリヤ」の唱歌に混じって、話し方の番組もあり、その題目は児童にふさわしい中身で満ちている。『蕃地教育』9号（昭和10年3月4日）に紹介された三年生の題目には「私の家」、「豚」、「畠」、「農業」、「水牛」などがあり、いずれも身近な話題を題材にしているのが大きな特徴である。幼い児童の話題としては、これが精一杯のところであろう。

参考までに言うと、『理蕃の友』9巻5号には昭和15年に高雄州（当時）下で開催された国語演習会の模様が掲載されている。その時の演題には、始めて日本語で買い物したときの嬉しい体験を語った「国語の有難さ」とともに、「青年の努め」、「銃後の国民」、「大陸は招く」など児童にとって高度な抽象的内容の弁舌も見られる。いささか高度な内容を思わせるが、こうした演題は日頃から練習していたので出来映えはすばらしかったと記されている。しかしながら、その場で課した即興題は芳しくなかったという反省もあった。国語演習会は長期間の練習の成果発表を競うのがほとんどだが、この反省からは、その練習期間に教員の指導がかなり行われていたという推測が可能になろう。あるいは、指導教員の熱の入れ方が勝敗を決したとも言えるだろう。

事実、筆者の聞き取りでもその推測は確かめられる。かつてタイヤル族の村で地区対抗の国語演習会の模様を聞き書きしたとき、それに参加した当時教育所の四年生であった古老は、「霧社事件」が題目だったと語ってくれたことがある。子どもにこの事件の本質は分かるはずがないと改めて聞き質すと、草案は教育所の警察官が書き、自分は朗読しただけだったと言う。そして、本人ははきはきとした日本語で話したので、評価は高かったと打ち明けてくれた。推測を混じえてのことだが、花蓮港庁や高雄州の国語演習会でも、教育所の先生の事前の訓練が、結果として内容や構想の採点での好結果を導いた、と言ってよいだろう。

採点の基準がどのようなものであったにしても、国語演習会の目的が何であるのか、はっきりしていることがある。それは、国語演習会が個人戦であるとともに、教育所単位の団体戦でもあることで、教育所の面子を賭けて、あるいは自分の業績や将来の出世をもくろんで、教育所の指導教員も力を込めて参加したことである。実際に、好成績を挙げた教育所は教育・教化の普及に努めたとして、上司からの賞賛の声を博したし、また賞賛を得るために、たえまぬ努力を傾注していた。『蕃地教育』9号（昭和10年3月4日）では、国語演習会の成績の総評を末

尾に掲げていて、それを見ると教育所での力の入れようが勝敗に大きく関わっていたことが分かる。教育所児童・国語普及会員の成績優良者を出した所は、国語指導所を設置した村で、いずれも教育・教化の普及に基因した結果にはかならない、との注釈が付いているからである。こうして、国語演習会の隠れた素顔が浮かび上がってくる。国語演習会とは、教育所の面子をかけての競演の場であり、児童を競争の渦中に投げ込むことによって、警察官吏が自己栄達を達成する場でもあった。

演習会が終わった翌2月16日と17日は、教育所関係の警察官などが出席して教育所教育研究会が開かれた。この会議では、「蕃人教育」、「蕃人教化」などの内容が討議され、今までの反省と今後の統治政策が検討された。この事務的な打ち合わせを最後に、一連の行事は終了する。

国語演習会は全島的に盛んに行われ、日本語学習は至る所で熱気を帯びていた。そのために、国語普及会、あるいは夜学会は勢力的に活躍していた。例えば、『蕃地教育』8号（昭和10年2月2日）には、平林教育所の模様が紹介されている。その国語普及会は「夜学会」とも呼ばれ、冬の二ヶ月間にわたって活動していた。その学習会では、国語とともに算術、唱歌、衛生、農業、遊戯、裁縫が教科目として並んでいた。講師は教育所巡査のほかに、補助講師として農業講習所卒業生、そしてすぐ後で触れる国語章受領者が分担していた。村人は国語演習会の対抗試合に出席し、優秀者は表彰され、このようにして競争意識は醸成されていったのである。シラガン教育所もまた、同じようにして「夜学会」の名のもとに国語発表の競争会が行われていた。人々は「国語はよく勉強して他社に負けぬようにしたい」と抱負を語るなど、熱気を帯びていた。

国語普及を目指した国語演習会の登場は、この時代の特色をよく浮き彫りにしている。人々がこの競争に熱中する様子は、至る所の教育所で見ることができる。タウサイ教育所の警部は、同窓会の席上で「国語ヲ常用スル蕃社」を力説しているが、その発言はこのような時代風潮のなかでの発言である。『蕃地教育』12号（昭和10年7月19日）に載ったその警部の発言は、併せて日常生活の様々な面にも触れている。すべての点において他村より一歩前に進むよう心がけ、常に土に親しみ刹那的な生活を改めることを力説したその訓示は、生活改善運動を目指したもののだが、日本語学習はこうした運動とともに進行していった。

総督府の木目の細かい植民地政策は、末端機構の村落を掌握することに重点が置かれていた。国語競演が「蕃社」、つまり村落を基盤として組まれていたことで、植民地統治の基盤作りは村落から出発していた。行政の末端組織としての村落をしっかりと統治することによって、植民地経営の安定は保障される。植民地統治の最前線にいた警察官吏は、そのための歯車として働かせられていたし、またよくその任務を心得ていた。国語普及を通して日本人へと同化させる試みは、こうした地道な取り組みから出発していった。そして、この基盤整備に基づいて様々な生活改善運動は試みられていった。

#### 4 日本人の創造

国語演習会が台湾各地で行われ、日本語習得熱が異常に高まっていた昭和10年代は、皇民化運動、そして皇民奉公運動が全島的に展開されていた。だが、それ以前にも総督府は社会教化事業としての取り組みを怠っていなかった。総督府は、家長会、主婦会、婦人会、青年会、壮丁団、同窓会、学友会、父兄会、国語講習会、矯風会など、ありとあらゆる手だてを尽くして民間組織の整備と拡大を目指していた。その取り組みは、とりわけ昭和期になって本格化し、山地にまで及んでくる。

中川健蔵の総督時代（昭和7～11年）は、とくに飴玉政策が採用され、原住台湾人に対する懐柔策が実施された時期である。教育所児童のうち優秀者を表彰する「優良児表彰」制度が昭和5年に始まった。昭和7年には「理蕃善行章授与規程」が制定され、理蕃行政に貢献した一般人には「理蕃善行賞」が褒賞金つきで授与された。昭和8年になると、優れた実績を上げた教育所に対して「優良団体表彰」が行われるようになった。「国語普及及奨励」という名目で、日本語普及に貢献した教育所が警察官吏の表彰の対象になったのも、この時期からである。この年には、日本語の上達者に「国語賞」を授与する褒賞制度が花蓮港庁で始まったが、この制度はまたたく間に台湾山中の至るところに広まった。

褒賞制度に裏打ちされた日本語学習熱の高まりは、熱を帯びれば帯びるほど、過激な行動を伴ってくる。『理蕃の友』は、そうした過激な雰囲気包まれた運動を伝えている。その6巻11号（1937年）では、タイヤル族の南澳村での動きが報告されている。その村の青年団が日本語の常用を申し合わせ、村に矯正箱を設け、もしタイヤル語を話したなら、違反者の氏名、違反年月日、その事項を無記名投函することにしたという内容である。7巻6号（1938年）では、台北州の青年団の自発的活動として、国語普及を徹底させるため、毎年1月と7月の二回、各戸に備え付けの国語調査表によって国語調査を始めたことが伝えられている。いずれも、日本語の常用を図った、あまりに過激な地元の動きである。

こうした異様なまでの熱狂さは当時の台湾に広く蔓延していた。折しも総督府は官製の青年団を組織したが、教育所を卒業した若者が国語普及のお先棒を担ぐよう仕組んでいた。例えば昭和9年に創立をみたバチガン教育所の「青年団」は、道路補修、塵捨て場の設置、便所の建設など、村の保全や衛生に関わる仕事を受け持ったが、そのほかに家長会と提携して陋習の改善を図り、国語の普及にも努めていた。タウサイ教育所の青年団も、総督府の末端組織として生活改善運動に荷担するなど、大いに活動していた。この青年団の模範的な活動は、総督府から優良団として表彰されることになったほどで、その表彰式で総督府の官吏は青年団の活動について精神的訓話を垂れ、国語常用の意義を力説している。

このような状況下で、山奥の随所の村では「国語の村」、「国語の家」という標語が飛び交っていた。何人も日本語が達者な者のいる家族には「国語の家」と記した標札を戸口に掲げることが流行し、日本語学習熱は加速していく。その流行は、村人が一丸になって日本語を習得し、その成果に見栄を張り合うという状況を醸し出す結果を生んだ。こうした雰囲気煽り立てるために、総督府は優秀者には「国語章」を授与する政策を考案していた。「国語章」とは、日本語の上達者に対して官憲が授ける一種の勲章である。それを得るためには、常に日本語を話していることが必要で、またその事実が官憲によって認知され、評価されなければならない。

ところが、国語上達の審査基準は警察担当官の恣意に左右され、地域によって区々であったようだ。そこでタイヤル族のタビト教育所では、検定試験の実施まで行い、この制度の権威を高めようとする。この試験には、教育所卒業生が53人参加した。『蕃地教育』5号（昭和9年10月25日）には、そのときの試験問題が紹介されている。問題は書取（50点）、作文（50点）、会話（100点）で、二百点満点で採点された。ちなみに紹介すると、書取りは、「犬ガサカナヲヌスンデ橋ノ上ニ来マシタ。下ヲ見ルト水ノ中ニモサカナヲクワヘタ犬ガ居マス」という文章を読み上げ書かせる問題であり、あるいは「手、足、子供、病気」などの漢字を生徒に聞き取らせ、書かせる問題である。この問題の出来はよくなかったようで、総評では「漢字ヲ忘却シ、成績不良」とのことであった。作文は、「ヨイ日本人トナルニハドウシタラヨイカ」という問題を一時間かけて記述させる問題で、これは予想外にも優良答案が多かったようである。会話は、「平地トハドンナ所デスカ」、「親ニ孝行スルトハドウ言フコトデスカ」などと質問し、話し方の巧拙を採点した。この試験の佳良者は23人だけというから、国語章を獲得することは決して易しいことではなかった。

青年の間では、日本語能力の評価は名誉と考えられていたようである。このタビト教育所での検定試験では、受験者は非常な関心を寄せていたという。やせ我慢をしてまで競争しあうのに生きがいを感じるタイヤル族にとっては、この種の検定試験は競争心が刺激される恰好の場であったのかも知れない。かつての若者が競って首狩りに興じていた光景に類比させるのは行き過ぎではあろうが、タイヤル族の巧みな競争心理を突いた国語章の授与は、総督府にとって予想通りの成功であった。

こうした国語章の授与は、人々の名誉心を競い合わせるよう仕向けた総督府の作戦であり、国語学習熱を沸騰させるのに貢献した。その結果は、日本語の堪能な若者が数多く生産され、その若者は未来を担うエリートとして期待されていく。国語章を授与されたある若者は、新生日本人としての誇りまで感じ、恥じらいながらも、こう言うほどである。「私は国語が左程分からぬに国語章まで授与されて恥しい位に思っている。第一私共は恥しいながら日本の国民です。それに国語の分らないのは恥しいことであります。——私は国語章を授与されんことを目的で国語を覚えるのではなく、日本人として国語を使わねばならないと思って、常に社衆にも

話して聞かせて居ります。一生懸命勉強して一日も早く立派な国民になりたいといつも考えて居ります」（『蕃地教育』5号、昭和9年10月25日）と。この表現は、日本人巡查の口を通して紹介されたもので、当の本人の発言そのものとは言えないかも知れないが、当時のタイヤル族青年が抱いていた感情を適切に語っているように思える。やや生硬な精神主義の鎧を被りながらも、日本語能力を官憲から評価されたことからくる喜々とした面もち、いやそうした世俗的評価を乗り越して日本人として認知されることへの切実な思い、こうした思いが彼の心底には横たわっている。日本語を話し、そのために日本人として認知されることは、彼ら若者にとって至上の喜びであった。

昭和10年代には、何人ものエリートたちは日本人になることに誇りを感じていたし、また教育所自体の成果も格段に上がっていた。日本人としての意識の覚醒は、旧来の伝統を卑下する感情を生みだしたし、それとは両義的な感情として、日本人から卑下されることに対する反発心も呼び起こした。再び『蕃地教育』5号（昭和9年10月25日）から、ある挿話を取り出してみよう。ブヌン族のある若者が青年団活動の一環として荷作業に従事していたとき、「蕃人」という差別的言葉を浴びせられ、憤激した話である。その若者は、「私共ハ一律ニ云ヘバ愉快ニ行軍ガ出来タガ、然シ山ノ警察官諸氏及其奥サン達ガ蕃人蕃人ト云ハレタノガ一番残念デアッタ」と心情を吐露している。日本人になろうとしているのに、当の日本人から罵声を浴びせられたことに対して、その若者は憤っているのである。この警察官とブヌン族の若者との向かい合う姿勢はまったく異なっている。文明世界の頂点に立つ警察官にとって、原住台湾人は未開の地に住む劣った人たちにすぎないし、その若者は文明への羨望を抱きながら、その高みに立つ日本人には違和感を感じている。

差別とは、何も差別語彙によって明示化される現象ではない。例えば、植民地官吏はしばしば原住台湾人を「可愛い」という形容詞を含むレトリックを用いて対象化した。この「可愛い」という言い回しこそ、植民地官吏の原住台湾人に向けた蔑視の常套語彙であった（山路勝彦1994）。『蕃地教育』9号（昭和10年3月4日）で、「感謝と希望」と題する作文を寄せた清水教育所勤務の教員の発言にも、その言い回しは見られる。情操教育の一助として、原住台湾人にオルゴールを見せてあげたい衝動に駆られたその教員は、「遠ク文化ニ置キ忘レラレタ可憐ナ蕃人」のため、と自己の行為を正当化する。あるいは同じ5号（昭和9年10月25日）には、エカドサン教育所の教員の感想文が掲載されている。ブランコに興じる子どもたちに対して、彼は「別族異種ノケジメモナク、唯可愛イ」と感慨を寄せている。可憐といい、可愛いといい、これらの日本語は地位上の上下関係を反映した言葉であり、その無意識の用法のなかに文明の絶対的高みから原住台湾人を見おろす植民地官吏の心性が読み取れる。植民地下での支配する側と支配される側との関係は、このように不均衡であった。

日本の植民地支配の特徴は、このような不均衡な構図を隠蔽しながら、同化政策を徹底する



ことにあった。何よりも支配する日本の態度は不変のまま、支配される側だけが変化を要求されるという不均衡な関係は自明視されたまま、現実の同化政策は進行した。国語演習会における日本語狂乱劇は、このような構図を前提にして実施された。植民地官吏は、このような日本が仕組んだ世界に参入できるよう若者を養成したが、その本性は隠し通すことはできなかったようである。くだんのブヌン族の若者の失望観は、この警察官の心の奥底の闇の世界を照射している。

しかしながら、表面を取り繕ったものであれ、その作業の最初から最後まで日本人として遇せられたなら、そのブヌン族の若者も悦に入り、日本人と同じ心情を共有していると思いで、活動したかも知れない。それほどまで原住台湾人に向けた日本の同化政策は、闇の世界を陰蔽するほどの巧妙さを持ち合わせていた。そして事実、少なからずのエリートたちはその巧妙な日本の作戦に絡め取られ、日本人として遇されることの喜びを抱いて活躍していた。昭和期の日本は「生活改善運動」という名目で様々な伝統、例えば祭祀や儀礼を廃止させ、代わりに日本風の神社信仰や生活慣行を持ち込んだが、こうした運動に積極的に荷担したのは、日本人としての喜びを胸に秘めた現地エリートたちであった。ブヌン族に伝わる伝統的な大祭、「マナクタイガ」（射耳祭）の祭りが消滅したのは、日本当局の強制的な圧力によるというよりも、こうしたエリートたちの判断の方が大きかった。

ブヌン族の最大行事マナクタイガ祭は、男のみによって行われる狩猟祭であって、この儀礼の中心は、骨架に飾った鹿の耳を子どもが射ち当てる行事である。それは吉凶の判断を得るため、その後で村の男たちが順番に鹿の耳を射ち当てていく。派手な飲食を伴うこの儀礼は長期間続き、人々は農耕作業を休んでこの祭りを楽しんでいた。しかもこの行事は各戸別に親戚知人を招待して行い、そのつど児童は教育所を休むので教育所の出席率は悪くなり、教員たちの間では頭痛の種であった。また7・8歳の子どもにも実弾をもって鹿の耳を射たせるし、大人はといえば、銘酹すると蛮勇を誇り首狩りの歌を歌う有様であった。それだから、莫大な米や粟を消費する酒宴は経済的にも、衛生的にも、また風紀上も好ましくないと考えた教育所は、「旧慣改善」をもくろみ、機会あるごとに廃止を求めている。

事は簡単に運ばなかったが、『蕃地教育』11号（昭和10年6月15日）は、とある村での出来事を伝えている。それは、折しも台北見学に選ばれた3人の青年の働きである。その青年たちは台北の文化施設を見て、自己の文化の遅れているのを悟り、帰村後、習慣の改変を村人に説いて廻った。このためマナクタイガは一日だけに短縮され、しかも首狩り歌を歌わないことで村人の了解が得られた。そればかりか、この祭りにふさわしい歌と踊りを教えて欲しい、と村人は警察官に申し出た。結局、この祭りは日曜の一日だけに短縮され、新しい唱歌を歌って終了になった。2年後、『理蕃の友』6巻7号（昭和12年7月1日）には「マナクタイガ神式となる」という見出しで、この顛末が紹介されている。教育所の校庭に神主を呼び、天照皇大神を迎え、

荘重な邦楽を奏で、修祓、献饌、祝詞、玉串の奉典の後、撤饌して終了したこの祭りは、「完全に旧慣を打破した」として警察官吏の自慢の種になった。

若者の心を巧みにとらえる総督府の作戦は、ほかにもいくつかある。すでに見たように、教育所活動の目玉商品の一つは修学旅行であった。その修学旅行は単なる休暇を楽しむ旅行ではなく、総督府の深い意図が隠された統治のための道具であった。各地の日本の施設を見て廻り、「文明」対「未開」という構図のなかで文明の圧倒的優位性を悟らせ、自己の伝統を卑下させるのがこの修学旅行の目的であった。そして教育所のこの試みは、数ある同化政策のなかでも大成功を収めたものの一つであった。

ここでまた『蕃地教育』12号（昭和10年7月19日）から、修学旅行を経験した教育所の児童が、好奇心のあまり大きな瞳を瞬かせて、驚きの声を上げている様子を引用してみよう。その児童は、得意げに東京観光の模様を仲間の児童に語って聞かせる。その内容は、要約するとこのようになる。すなわち、「東京の家は高い。どこへ行っても神様ばかり。汽車は早く走る」と。その子は素直に当時の東京を語るの、聞き入っている児童は感嘆のため息をあげて、こう心に誓うほどである。「内地が大ヘン進ンデイテ立派デアルト云フコトハヨク解ッタ。我々モ警察官ノ指導ヲヨク守ッテ改良シナケレバナラナイト思フ」と。またある修学旅行経験者は、こうも言っている。「汽船の大きさは想像出来ない。内地人も農業をする。各都市の文化の発達には驚く他はない」と。教育所の用意した修学旅行は、文明に接触させて頭脳を洗脳し、意識改革を図ることで、その目的は成功した。指導者としての警察官の威厳を発揮でき、目標とした生活改善の手本を示してくれる修学旅行とは、なんと重宝な教材ではないか。児童たちが日本当局が仕掛けた罠にまんまとはまってしまうほど、日本当局の作戦は巧妙であった。

この修学旅行作戦は、一面は生活改善を促進する名目で行われた。それゆえ、訪れる場所も歴史に縁のある古都ではなく、高層建築の並ぶ市街地や農業の先進地、あるいは軍関係の施設などであった。その目的は日本の産業水準の高さを実感させることにあったので、揺るぎない文明の優位を叩き込んだ後では、差異はあまりに大きく感じてしまう。総督府が、その落差を悟らせるのに用意した鍵概念は「発達」という言葉である。この言葉は実に深く人々の心をつかまえ、台湾全土で広く使われるようになった。今日でも、各地の原住台湾人と接触すると、盛んに「発達」という言葉が会話の中に登場する。例えば、「日本は工業国で発達しているでしょう」と言うように、日本との違いを「発達」という言葉で表現する風潮は今なお強い。この概念が飛び交う世界、つまり彼我の相違を文明の落差に置き換える思考世界は、修学旅行などを通して教育所が青年たちに吹き込んだものであった。

日本の植民地政策は、警察権力の行使ばかりでなく、多様な戦術を散りばめて実施されている。そのなかでも、どのように原住台湾人を洗脳し、懐柔するか、その仕掛方は重大な問題であった。領台五十年の歴史には、霧社事件などの日本への抵抗運動も勃発したが、総じて言え

ば、そしてとくに皇民化政策を実施した時期では、同化政策は総督府の狙い通りに進んでいった。この政策の結果は、伝統を忌避する風潮を産みだし、その結果として原住台湾人の認同に揺らぎをもたらす原因を作ったことで将来に問題を残したが、日本当局が試みた末端機構での教育方針は巧妙であったと言わざるをえない。日本語普及を戦略目標とした国語講習会は、台湾全土を熱狂的な渦に巻き、国語演習の名を借りた芝居がかった饗宴の場と化していった。この狂乱的な営みこそ、それなくしては日本人の創出という当初の目的が達成されなかったと思われるほど、高度にして、かつ独創的な日本の植民地経営の作戦であった。

#### 引用文献

- 弘谷多喜夫・広川淑子 1973 「日本統治下の台湾・朝鮮における植民地教育政策の比較的研究」『北海道大学教育学部紀要』22。
- イ・ヨンスク（李妍淑）1996 『国語という思想』東京：岩波書店。
- 井出季和太 1937 『台湾治績誌』台北：台湾日日新報社。
- 石剛 1994 『植民地支配と日本語』東京：三元社。
- 伊藤生 1935 「蕃人教育之今昔」『蕃地教育』9号，花蓮：花蓮港庁警務課理蕃係。
- 上沼八郎 1975 「台湾教育史」世界教育史研究会編『世界教育史体系』2（日本教育史Ⅱ）東京：講談社。
- 川村湊 1994 『海を渡った日本語』東京：青土社。
- 国府種武 1961 「台湾における日本語教育にあらわれた国権思想」『日本文学』10号。
- 丸井圭治郎 1914 『蕃童教育意見書』（未定稿）。
- 松村生 1935 「修学旅行雑感」『蕃地教育』10号，花蓮：花蓮港庁警務課理蕃係。
- 斎藤生（康彦）1936 「高砂族国語講習所の創設」『理蕃の友』5-8。
- 宋秀環 1995 「日本官製青年団の台湾への移植：台湾原住民アミ族を例として」日本民族学会29回研究大会（大阪大学）発表。
- 鈴木質 1928 「蕃人教育改善私見(五)」『台湾教育』306。
- 台湾教育会編 1939 『台湾教育沿革誌』台北：台湾教育会。
- 台湾総督府民政部蕃務本署 1911 『理蕃誌稿』台北：台湾総督府。
- 台湾総督府警務局 1934 『台湾総督府警察沿革誌』(五) 台北：台湾総督府。
- 台湾総督府警察本署 1918 『理蕃誌稿』台北：台湾総督府。
- 鷹野良宏 1992 『青年学校史』東京：三一書房。
- 辻信治 1941 「教育寸言」『理蕃の友』10-7（115号）。
- 山路勝彦 1994 「植民地台湾と〈子ども〉のレトリック」『社会人類学年報』20。
- 安田敏雄 1997a 『植民地のなかの国語』東京：三元社。
- 1997b 『帝国日本の言語編成』東京：世織書房。
- 著者不明 1935 「セラオカ通信」『蕃地教育』10号，花蓮：花蓮港庁警務課理蕃係。

附記 本稿は京都大学人文科学研究所での研究会「植民地主義と人類学」で発表した原稿（1998年1月19日）を基にしている。

なお、本文で引用した『蕃地教育』は国立中央図書館台湾分館（台北）所蔵本である。